

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00219

研究課題名（和文）日本画と臨床美術を融合した創作実践—心理学的質的分析と構造化による開発—

研究課題名（英文）Fusing Art Activities of Japanese Painting and Clinical Art : Synthetic Development with Psychological Approaches

研究代表者

柴田 眞美（SHIBATA, Mami）

跡見学園女子大学・文学部・教授

研究者番号：10260978

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：日本画と臨床美術の親和性を見出し、造形分野、文系分野、一般の方々を対象として、両者を融合した創作実践及び心理調査を行った。得られた作品及び記述（尺度法・自由記述）等により創作実践の効果を確認した結果、日本画（本格的画材を用いる）と臨床美術の融合は感性の解放にとって有効である。「自分らしさ・自己発見 外部からの規制」、「自然らしさ・偶然 人為的コントロール」、「創作時の歓喜・達成感 困難・不満足」の3つの構造化概念が浮上した。美術を専門とするか否かによる、逆向きの＜美術の力のベクトル＞が示唆され、一般社会にとっての美術とストレス解消等についての質問紙調査との照合が期待される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本においても比較的マイナーな「日本画制作」と、圧倒的に西洋美術発想のプログラムの多い「臨床美術」を結びつけた新奇的な本研究の創作実践により、わが国でこそ実施可能な、心が解放される美術実践の一つの姿を提示することができた。一般に敷居が高いようにも思われがちな日本画が、実は大変心地よい画材であることを社会に示しつつ、日本文化を積極的に取り入れた臨床美術の実践プログラム、新たな創作実践開発に貢献する。得られた作品群と、参加者の記述を尺度法による統計的分析のみならず、そのナラティブな要素を見落とさずに追った分析手法には、美的・心的なものの追求の学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：Focusing fusing Japanese Painting and Clinical Arts, several Art Programs were practiced with some psychological researches for art field, liberal arts field and general field.

Results show that; Japanese Painting using real materials and Clinical Arts are effective for human mind (<Kansei>(sensitivity) relieve, Three pair concepts for analyses were found;< natural oneself・self awareness outside control>, <natural・accident artificial control>,<delight・achievement of creation difficulty・dissatisfaction>, Contrary vector of Art power depend on art field or not were indicated, which is expected to consistent with psychological questionnaire investigation for general society.

研究分野：日本画、美術、臨床美術

キーワード：日本画 臨床美術 心理学的質的分析 心理尺度 創作実践

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

音楽が人の心を癒し活性化するように美術にもそのような力が宿されている。天然素材を用い、大自然の持つ根源的な力に対する畏敬の念を持つ日本画(日本画画材)と、わが国の高齢化社会(認知症など)に取り組む脳神経外科医と競争的な美術に疑問を持った美術家との協働により立ち上げられた芸術療法である臨床美術(の手法)に親和性を見出し、これらを融合した新たな「創作実践」を行いつつ、その効果について心理学的な量的・質的分析を用いて分析し、心を解放する新たな創作実践を開発することに、美術を現代社会における人々の幸福に生かす意義を見出した。

2. 研究の目的

日本画と西洋的な美術を主体にした臨床美術の融合は新奇的である。また美術の創作活動が人の心に与える影響については、各疾患の行動特性や数値化などの定量的分析があるものの、美的創作活動における分析は困難である中で、心理学において注目をされつつある質的分析を量的分析とともに援用し理論的裏付けを得ることを試みる。また可能であれば、わが国の臨床美術に通ずるエンカウンターアートが実施されているフィンランドでも実践を行い、反応を確かめる。これらにより、**日本画と臨床美術の融合による創作実践は可能か、そのような創作実践が人の心にどのような影響をもたらすかについて質的研究によりどのように捉えられるか、そして異文化圏でも共感を得られる実践の開発につながるか、**を問いとし、これらを解明することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 造形分野の被験者に対する創作実践および制作の振り返り記述による調査

まず、画材タッチや構成と色彩ワークを経て様々な感情から出発するアナログ構成画面制作をするグループ(48作)、描写や図案化、画材の技法練習を経て平面構成(カラー)の自由制作をするグループ(25作)と、生の和紙の礬砂引きなどの手間のかかる準備から日本画の画材を用いた和紙と色彩の制作をするグループ(50作)の分析を行った。

(2) 造形分野の被験者に対する創作実践および質問紙記述等による調査

「通常課題×通常画材」、「臨床美術的課題×通常画材」、「臨床美術的課題×日本画画材(ライト)」、「臨床美術的課題×日本画画材(ヘビー)」の4グループについて創作実践および質問紙調査(進歩や満足度など、素材や自己との対話、開放感などの心理的感触)の分析(回答者の延べ人数223人)を行った。

(3) 造形分野の被験者に対する創作実践および質問紙記述等による調査(事前・事後)

造形分野の被験者を対象に、「臨床美術的課題×日本画画材(ヘビー)」の創作実践を行い、上記(2)を改変した質問紙調査及び制作についての自由記述を、創作実践前後で行った(29作)。

(4) 文系分野の被験者に対する創作実践および制作の振り返り記述による調査

文系分野の被験者を対象に、「臨床美術的課題×日本画画材(ヘビー)」の創作実践を行い、作品および制作の振り返り記述分析(回答者延べ人数30名)を行った。

(5) 文系分野の被験者より1名を抽出し、本人のナラティブ(物語り)と美術創作体験のかかわりに関するインタビュー調査を行った。

(6) 一般の方々を対象とした、気軽なワークショップ

一般の方々を対象とした気軽なワークショップ(「臨床美術的アプローチ×通常画材」、「模写的課題」×「日本画画材(ライト)」)を実施し、参加者の様子の観察と聞き取り調査を行った(参加者数延べおよそ100名)。

(7) 日本画画材を用いた平面作品やインスタレーションの展覧会発表

研究代表者が所属する、創画展(春・秋)、現代造形表現作家フォーラム(春)、花とみどり・いのちと心展(冬)において、日本画画材を用いた平面作品や、インスタレーションを発表し、鑑談話や、感想ノートの記述から、鑑賞者の反応を収集した。また、臨床美術的課題×通常画材・墨によるワークショップも開催した。

(8) 一般社会人における美術についての質問紙調査

一般社会人を対象に、美術への関心の有無による2グループに対し、美術とストレス解消や、日本画、街中のアートについての質問紙調査を実施した(各グループ875名)。

4. 研究成果

(1) アナログ構成画面、平面構成(カラー)、「和紙と色彩」の創作実践の制作の振り返り記述を分析した結果、<感覚的な事柄>として、苦心的、歓喜的、発見的、感性的、自己発見的の5項目が、<技術的な事柄>としてアイディア、観察、形・構成、色・光・塗り・滲み、感触、筆

運び、修練の7項目が浮上した。そして構造化に際しての概念として、自分らしさ・自己発見 外部からの規制、自然らしさ・偶然 人為的コントロール、創作時の歓喜・達成 困難・不満足 の3対概念群が示唆された。

(2) 創作実践の課題が臨床美術的か通常的か、画材が通常画材か日本画画材(ライト)かの組み合わせにより4種類の創作実践を心理学的尺度法により量的分析し、「創作体験を体験しての感触・実感」および芸術療法体験尺度改訂版の5因子(気持ちの解放・安定、満足感、自己理解、緊張感、子供時代への回帰)を分析した。臨床美術的課題で通常画材と日本画画材を比較した場合では、「創作実践を体験しての感触・実感」では進歩や達成感、自己肯定感覚においては通常画材の方が上回っていたが、芸術療法体験尺度の5因子では、日本画画材(ライト)の方が上回っていた。異なる対象、異なる創作実践の比較では、「創作実践を通じての感触・実感」においても、芸術療法体験尺度の5因子においても、「通常課題×通常画材」よりも「臨床美術的課題×日本画画材(ヘビー)」の方が優位に上回っていた。これらの結果から、「臨床美術的課題×日本画画材(ヘビー)」が最も期待できると考えられたが、ただし日本画画材に関しては用いるならヘビー(つまり簡便なものではなく岩絵具などの上質画材)である必要性があり、また、初めて扱う場合は簡便な画材であっても扱いの不慣れから進歩や達成感、自己肯定感覚が高くなりにくい傾向もみられるのではないかと考えられた。

(3) 「臨床美術的課題×日本画画材(ヘビー)」の創作実践の参加前の記述では、期待感などのポジティブな言葉としては『初めてで楽しみ、興味があり楽しみ、絵具が久しぶりで楽しみ、子供の頃の思い出を再現できそうで楽しみ・・・』などが、不安などのネガティブな言葉としては『知識がなく不安、難しそう、上手いかわない気がする、迷走しそう・・・』などが見られた。参加後の記述では、『最初考えていたものと違った、もう少しバランスが取れたと思う、思い通りにいかなかった、もっと感情のままに描きたかった...』などの不満足な言葉もみられたものの、満足を示すものとして『ちゃんとできた、満足できる作品ができた、好きな色合いを出せた、岩絵具を生かせた、好きに構成できた、雰囲気を出す事ができた、自分の頭の中を忠実に構成できた、自分が想像した感じで描けた、自分の心から感じた絵を描くのは楽しい・・・』などが見られ、『自分の～』の言葉の散見により何らかの「感性の解放」が効果的に生じていると考えられた。

(4) 文系分野の被検者による、同様の創作実践後の振り返り記述において、『重ねる美しさ、深み、失敗しても修正できる、愛着がわいた・・・』などの画材との対話や、『自由に腕を動かしてよい、否定しないのもよい、茫漠とした思いを絵にできて良かった...』などの言葉も見られ、これらは自身の心との対話や感性の解放に繋がるものと考えられた。

(5) 文系分野の被検者より抽出した(大変美術創作にのめりこんだ方)にじっくり話を聞く機会に恵まれた結果、かつて中学の頃は不登校にさえなったが、塾などに通い高校進学し、文学と美術が学べる大学に進学し多くの美術実習に参加することにより「心の居場所」を得ることができたというナラティブ(物語り)を得た。本人の制作は、大変に真摯で根気強い。また大変に感覚が鋭敏であるがゆえに生きにくさも感じる実世界の中で、美術により感性が解放されるのであろうと思わされた。

(6) 気軽なワークショップであったが、臨床美術的アプローチや、日本画画材(ライトが主、一部希望者にはヘビーも用意)し、制作の様子の観察と、聞き取りを行った結果、絵を描くことが好きな方はもちろんのこと、苦手意識のある方々もいざ始めてみれば、楽しそうにのめりこんで集中して制作する姿が多く観察された。何より制作終了時の笑顔により、穏やかで楽しい時間を過ごされたことが伝わってきた。言葉では、「久しぶりに絵を描いたが楽しかった」「子供の頃のような感じ」「時間を忘れた」などの会話が散見された。

(7) 日本画画材を用いた平面作品やインスタレーションの展覧会発表において、半抽象的な日本画画面から、鑑賞者が自由に心を遊ばせて様々な世界を思い描き、なかには絵から想像した「詩文」をよせる方もいた。また、インスタレーションでは、『美術に苦手意識があったがこんなにも自由でいいのだ、子供にもこのような美術を体験させたい...』などの感想が寄せられ、作者が日本画の修練に加えて臨床美術を勉強し制作時の心が解き放されるように感じながら制作していることが、鑑賞者にも伝わっているものと思われた。また、ただ見るのみではなく、ワークショップでミニ制作をする、感想ノートに自由に絵や(子供たちのお絵かきも多かった)感想文をしたためる、絵から想像した「詩文」を創作する・・・などの能動的なアクションを引き出せることは、貴重な現場であった。

(なお、研究代表者は研究期間中に(美術製作や造形を志すのではない)文系の教育機関に移籍している。その中で、美大や美術学部以上に「純粋に」創作の喜びを体現する学生や一般の方々を目にできたことも、本研究の<創作実践>で得たいわば予期せぬ発見であった。そして<美術の力>を、「生きる力、人生の幸せ(感性の解放、安らぎ...)」()、「他分野に通ずる力(構築力、鋭敏な観察力・破壊と創造...)」()、「美術の技量の向上(修練、描ける、作れる...)」()とした時、美大などで美術を志す場合は何よりも が出発点でありやがてそしてへと、そして他分野や広く社会においては、 のベクトルで<美術の力>が作用し、両者ともにそれぞれのベクトルをぐるぐると何重にも巻き重なっていくという構造の示唆を得た。)

(8) 必ずしも美術や造形を志すのではない分野や、広く一般の方々において、予想以上にいうよりむしろ美術や造形を志す人々以上に「美術を楽しむ」様子がうかがわれたことにより、広く一般社会人を対象とした<質問紙調査>を実施した(美術への関心のあるなしで2群(各875サンプル)に分け、美術によるストレス解消や気持ちのやわらぎ、日本画について知っているこ

とやイメージ、街中におけるアート作品について、に関する設問) これについては現在分析を続けている。

(9)以上を総合して、以下の3項目にまとめられる。

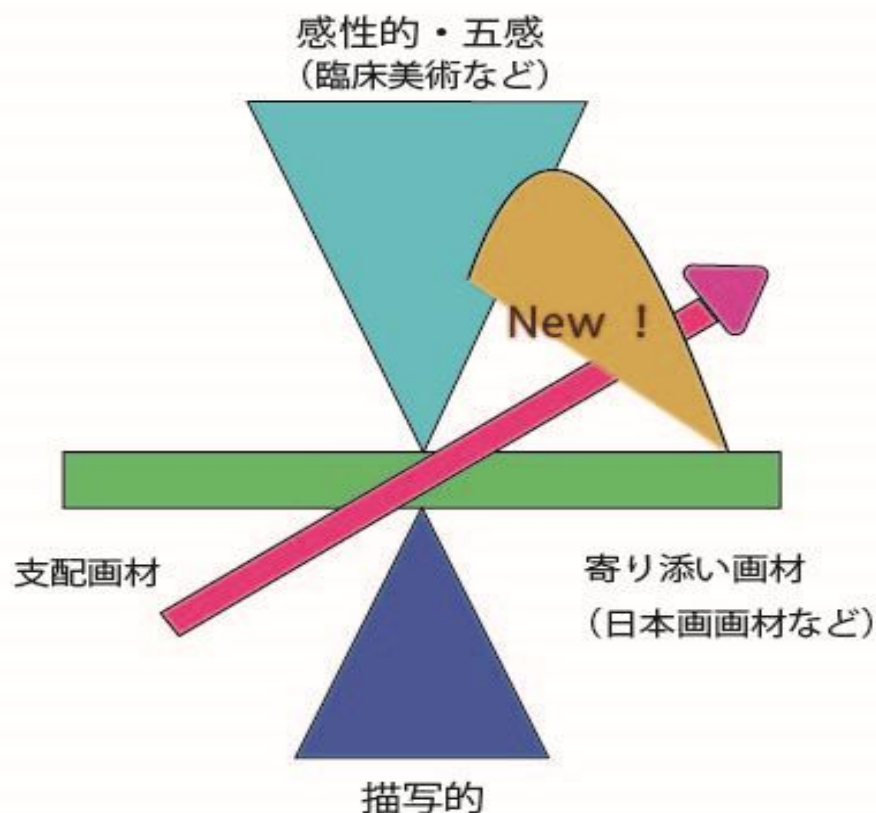
日本画と臨床美術の融合による**創作実践は可能**である。特に「臨床美術的課題×日本画画材(ヘビー)」の組み合わせによる実践は、「感性の解放や自己肯定感」に有効である。ただし、ヘビーな画材は扱いに手間や慣れも必要であるので実施においては参加者の特徴に合わせて実践内容を工夫することが不可欠である。

創作実践参加者による「言葉の記述」の「構造化」のための<概念>として、自分らしさ・自己発見 外部からの規制、自然らしさ・偶然 人為的コントロール、創作時の歓喜・達成 困難・不満足 の3つの概念群が浮上した。

<美術の力>が、美術を志す者のベクトル(<美術の技量の向上> <他分野に通ずる力> <生きる力・人生の幸せ>)と広く社会における逆ベクトルとして存在しそうであることと、現在分析中の一般社会人における美術についての質問紙調査との照合考察に期待が持たれる。

今後の課題

代表研究者の移籍により凶らずも創作実践の機会が増加することとなり、最終年度においても創作実践のサンプルを増やすことに努めたため、最終的な「言語による構造化」はさらに続ける必要がある。また、当初予定していた、臨床美術と通ずるエンカウンターアートが実施されているフィンランドにおける創作実践は、長引く Covid-19 禍の影響で実施できず、海外(異文化圏)での実施および調査を通じての「日本文化の特質」を含めた考察は今後の課題となった。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 柴田眞美	4. 巻 50
2. 論文標題 「日本画と臨床美術を融合した創作実践－心理学的質的分析と構造化による開発－」のための予備調査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要	6. 最初と最後の頁 49-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 柴田眞美	4. 巻 20
2. 論文標題 日本画制作とその周辺－素材・いきもの・心との対話－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 跡見学園女子大学 人文学フォーラム	6. 最初と最後の頁 37-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 杉田秀二郎
2. 発表標題 日本画と臨床美術を融合した創作実践 心理学的質的分析と構造化による開発－中間報告：創作実践における心理学的量的データについての探索的検討
3. 学会等名 2019年度 文化学園大学・文化学園大学短期大学部学内研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柴田眞美
2. 発表標題 日本画と臨床美術を融合した創作実践－心理学的質的分析と構造化による開発 中間報告：創作実践の紹介と振り返り記述部分の分析経過
3. 学会等名 2019年度 文化学園大学・文化学園大学短期大学部学内研究発表会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

「人文学フォーラム」Vol.21/2023(跡見学園女子大学)(美術の効用を示す作例及び解題)
「跡見学園女子大学教職年報」第4号pp157-165(創作実践例の報告)
< 創画展(春季・秋季) > : 研究機関中毎年(感性を生かした日本画作品を発表)
(春 西武デパート、秋 東京都美術館)
< 現代造形表現作家フォーラム展 > : 研究期間中毎年 5月(日本画を含めた現代美術の発表)(東京都美術館)
< 花とみどり・いのちと心展 > : 研究期間中毎年 12月～1月(日本画を含めたインスタレーションの発表、ワークショップ含む)
(昭和記念公園 花みどり文化センター)

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	杉田 秀二郎 (SUGITA SHUJIRO) (70350204)	文化学園大学・国際文化学部・教授 (32674)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------